

FIREBIRD

# Adagio d'Albinoni

GARY KARR *double bass*  
HARMON LEWIS *pipe-organ & piano*



**DAMPC**

STEREO · DOCD · 0019

## 《アルビノーニのアダージョ／ゲリー・カー》

① アルビノーニのアダージョ (T. アルビノーニ=R. ジャソット編)	8:53
② ソナチネ 二短調 (L. v. ベートーヴェン)	4:45
③ 小品 第5番 (C. フランク)	5:56
④ アヴェ・マリア (J.S. バッハ=C. グノー)	4:24
⑤ 夢のあとに (G. フォーレ)	3:42
⑥ ガヴオット (J. A. ロレンツィーティ)	2:37
⑦ マドリガル イ短調 (E. グラナドス)	6:59
⑧ 精霊の踊り (Ch. W. グルック)	4:35
⑨ サマータイム (G. ガーシュウィン)	3:09
⑩ 夕星の歌 (歌劇「タンホイザー」より) (R. ワーグナー)	4:19

### ゲリー・カー

(コントラバス)

### ハーモン・ルイス

(1-4 : パイプ・オルガン / 5-10 : ピアノ)

DOCD-0019

## ●制作にあたって

日頃は第一家庭電器をご愛顧いただき、ありがとうございます。

世は真にデジタル時代、おびただしい種類のCDが毎月、発売されています。しかし皆様の中に、なんとなく「低域が軽いなあ…」と感じられた方はいらっしゃいませんか？ デジタル録音は、一般に、低域の伸びと安定性が良いといわれていますが、その低域の量感という点では、まだまだ物足りないCDが少なくありません。

そこで今回は、その不満を解消するべく、キングレコードのご好意により、コントラバスとパイプ・オルガン&ピアノのデュオとして有名なゲリー・カーとハーモン・ルイスによる小品集を企画いたしました。

'81年9月20日～22日の3日間に渡って、宝塚市のベガ・ホールで録音されたものですが、本CDは、デジタル録音をベースに、ゲリー・カーのCDとしては初めて、ゴールドCD化されています。(なお同時発表のDAMオリジナル・スーパー・

アナログ・ディスクの方は、デジタル録音とバラ録りされた、アナログ録音マスター・テープによるノンイコライザー、ノンリミッター・カッティングとなっています。)

なお、CD化にあたり、同時発表のアナログ・ディスクより、フランクの「小品第5番」とワグナーの「夕星の歌」の2曲多い合計10曲を収録いたしました。

特に第一曲目の、「アルビノーニのアダージョ」のコントラバスとパイプ・オルガンの圧倒的な低音にはきっとご満足いただけるのではないかと思います。ただし、再生にあたっては音量を上げすぎないように、くれぐれもご注意ください。

なお、本CD制作にあたり、プロデューサーの高和元彦氏をはじめキングレコード側の関係者各位に多大なご協力をいただきましたことを、厚くお礼申し上げます。

今後もDAM会員の皆様に少しでもお役にたてるソフトの開発に一層の努力をする所存ですので、皆様のご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

DAM推進委員会 **DAMDC**

## ●コントラバスの名手ゲリー・カー

コントラバスは、弦楽合奏やオーケストラの中で低音を担当する楽器として、きわめて重要な役割を果たしているが、その形状や性能からいって、敏捷な運動性や流麗な抒情性には乏しく、一般にはソロに適さない楽器と考えられている。もちろん歴史的にみれば、18、19世紀には、ドメニコ・ドラゴネッティ（1763～1846）やジョヴァンニ・ボッテジーニ（1821～89）、また20世紀には、ボストン交響楽団の常任指揮者としても有名だったセルゲイ・クーセヴィツキー（1874～1951）のような名手があり、盛んに独奏活動を行なって、この楽器の独奏楽器としての地位の向上に貢献した。ドラゴネッティやボッテジーニはまた、演奏活動だけではなく、作曲家としてもコントラバスのために協奏曲や独奏曲など、多くのオリジナル作品を残している。それでもなお、コントラバスは独奏楽器としての地位を十分に確立することが出来なかった。相変わらずコントラバスのリサイタルはごく稀であったし、コントラバスの演奏家が世の注目をひくということも減多になかった。大作曲家たちも、コントラバスの独奏楽器としての可能性には、ほとんど関心を示さなかった。従ってコントラバスのオリジナル・レパートリーは、ヴァイオリンやチェロのそれとは較べものにならないほど貧弱である。

しかし、ゲリー・カーの出現は、コントラバスをめぐるこのような状況を打ち破る、本

格的なヴィルトゥオーゾがついに現われたという感を深くさせる。コントラバスを自由自在に扱い、この鈍重な楽器にチェロには劣らないゆたかな表現力を与えたカーの超絶的な技巧と、つややかな音色で歌う優雅な抒情性とは、まったく従来の常識をはるかにこえるものである。しかもカーの演奏を、単なるテクニシャンの妙技ではなく、音楽的に魅了するものとしているのは、人間的なあたたかさを宿している点である。カーはコントラバス奏者である前に、まず本当の意味での音楽家であった。彼の場合は自分の心の音楽を表現する手段として、たまたまコントラバスが選ばれたにすぎないのではないだろうか。それだからこそ、カーの演奏はこの楽器の常識的な限界をこえることが可能だったのであろう。

ゲリー・カーは1941年にロサンゼルスで生まれた。彼の家系は、7代にわたって多くのコントラバス奏者を、世襲的に生み出して来たロシア系ユダヤ人の家系で、彼も9歳の時から小型の楽器を用いて練習を始めた。その後ニューヨーク・フィルの首席奏者だったヘルマン・ラインスハーゲンに師事、南カリフォルニア大学、ジュリアード音楽院でも学んだ。しかし、カーははじめ独奏者になるつもりはまったくなかったという。たまたま1961年、20歳の時にレナード・バーンスタインに認められて、ニューヨーク・フィルと協演したのがきっかけとなって、それ以後世界でも稀なコントラバスの独奏者として演奏活動をするようになった。わが国へは1980年、81

年、83年、85年、87年の5回来日し、そのすばらしい演奏を披露したが、このディスクは1981年の来日の際に、宝塚市のベガ・ホールで録音されたものである。音楽専用ホールとして昭和55年（1980年）に完成したベガ・ホールは、スイスのクーン社製のパイプ・オルガン（ストップ数24）を備え、音響効果のよいことでも話題のホールで、カーのコントラバスのゆたかな響きが、みごとに収録されている。

なお、彼の使っている楽器は、クーセヴィツキーの未亡人よりゆずられた1611年製の名器アマティである。

## ●楽曲解説

### ①アルビノーニのアダージョ

（アルビノーニ＝ジャゾット編）

トマゾ・アルビノーニ（1671～1750）は、アントニオ・ヴィヴァルディ（1678～1741）やベネデット・マルチェッロ（1686～1739）らとはほぼ同じ頃、ヴェネツィアで活躍した音楽家である。50曲あまりのオペラのほかに、数多くのソナタ、協奏曲、シンフォニアなどを残している。とくに器楽曲の作曲家としては、アルカンジェロ・コレリやヴィヴァルディよりもはるかに早く協奏曲集を出版し、バロック協奏曲の発達に重要な役割を果たした存在であった。

そのアルビノーニの作品の中で、今日もっともしばしば演奏され、広く親しまれているのが、この“アダージョ ト短調”である。し

かしこの曲は、厳密な意味で、アルビノーニのオリジナル作品ではなく、アルビノーニ研究家のレーモ・ジャゾットが第2次大戦中にドレスデンの図書館で発見した“トリオ・ソナタ ト短調”の手稿（作品番号なし）の一部をもとに書き上げたものである。手稿は数字つき低音のパートのほか、わずか6小節の2つの旋律の断片が記されていたに過ぎなかったが、ジャゾットはその低音パートから和声を出るだけ忠実に復元し、弦楽合奏とオルガンのための作品に仕上げた。ジャゾットの編曲は、アルビノーニのスタイルと緻密な書法をみごとに保存しており、きくもの心を奥底から洗い清めるような感動的な祈りの音楽を作り上げている。この作品は、ドイツの実存主義文学の巨匠フランツ・カフカの代表作をもとに、オーソン・ウェルズが脚色、監督した映画“審判”のタイトルバックに用いられて、大きな効果をあげ、一躍有名になった。

なお、ここではジャゾットの編曲をさらにフランチェスコ・ベレッツァがヴァイオリンと鍵盤楽器（ピアノ）のために編曲した楽譜によって演奏されている。

### ②ソナチネ 二短調（ベートーヴェン）

ベートーヴェンのようにポピュラーな大作曲家でも、その作品の中には滅多に演奏されないものがある。恐らくこの曲は、ほとんどの人達がはじめて耳にされるのではないだろうか。そして、ベートーヴェンに本当にこんな作品があるのかと、いぶかしく思われるに

違わない。たしかにベートーヴェンはコントラバスの独奏曲はひとつも書いていない。従ってこの曲も他の楽器のための作品の編曲ではあるが、間違いなくベートーヴェンの書いたもので、原曲は、キンスキー＝ハルムの作品目録で WoO43 (WoOは作品番号なしの作品) という番号を与えられている“マンドリンとチェンバロのためのソナチネ ハ短調”である。

マンドリンという楽器ははじめイタリアで発達したが、18世紀の後半になるとウィーンでもそのロココ的な優雅な音色が愛好されて、かなり普及していた。モーツァルトも1780年に、マンドリンの伴奏をもつて歌曲を作曲している。青雲の志を抱いてボンからウィーンに出て来た青年ベートーヴェンは、この都で活躍する多くの音楽家を知ったが、その中にボヘミア出身のヴァイオリニストで、マンドリンの演奏にも秀でたヴェンツェル・クルンプホルツという人物がいた。“ソナチネ ハ短調”は、このクルンプホルツのために、1796年頃に作曲されたものといわれている。

ソナチネとはいっても、ソナタ形式によらず、3部歌謡形式の単一楽章の作品である。哀愁を帯びた第1部に長調の中間部(トリオ)がつづき、原曲ではそのあとに第1部の反復(ダ・カーポ)とコーダが奏されるが、この録音では第1部の反復は省略され、中間部から直接コーダに入る。

なお原曲はハ短調であるが、ここではニ短調に移調し、マンドリンのパートをコントラ

バスで、チェンバロのパートをオルガンで演奏している。

#### ④小品 第5番(フランク)

ベルギーに生まれたセザール・フランクは、パリのサン・クロティルド教会のオルガニスト、パリ音楽院のオルガン科の教授などをつとめながら、自己の内心の声を探し求めるすぐれた作品を書きつづけたが、生前の彼はオルガン演奏の名手として高く評価されていたのに反して、作曲家としてはなかなか世に容れられなかった。その作品の真価が聴衆に本当に理解されるようになったのは、ごく晩年のことであった。

フランクはベートーヴェンの後期の作品や、ワーグナーから大きな影響を受けたが、一方ではバッハの対位法音楽にも傾倒していた。とくにオルガン音楽では、オルガンのシンフォニックな色彩感、大胆な転調や半音階の使用など、ロマン派のな特性に加えて、精緻な対位法の技法をも駆使しており、近代フランス・オルガン音楽の基礎を築いたのである。

この“小品第5番”はフランクが41歳の1863年に作曲された“ハーモニウム(リード・オルガンの一種)のための5つの小品”の第5曲を編曲したものである。アンダンティーノ・クワジ・アレグレット、4/4拍子で、深い祈りにも似た静かな旋律が、表情ゆたかに歌われる。

#### ④アヴェ・マリア(バッハ＝グノー)

フランス近代の代表的な作曲家シャルル・

グノー（1818～93）の歌曲。バッハの“平均律クラヴィア曲集”第1巻の第1番ハ長調の前奏曲をそのまま伴奏部に用い、その上に独唱の声部を書き加えたことでも広く知られている。作曲されたのは1855年、グノーが37歳の時である。

単純ながら美しい分散和音の伴奏によって、聖母マリアへの敬虔な祈りをこめた清らかな旋律が歌われる。素朴な旋律ながら、その洗練された美しさと、あふれるようにゆたかな抒情は、きく者を深い感動に誘わずいはおかない。原曲の独唱曲としてばかりでなく、ヴァイオリン、フルート、チェロなどの器楽用にも編曲されて、しばしば演奏されるが、コントラバスで演奏されるのは珍しい。ゲリー・カーはコントラバスのたっぷりした響きを十分にきかせるように、ゆっくりしたテンポをとり、さらにフレーズの入りなどで伴奏と微妙なずれを感じさせる奏法によって、器楽曲を原曲とする他の4曲とは違って、もとは声楽曲であったこの曲のもつ歌謡性への細かい配慮を示している。

〔以上・佐藤 章〕

#### ⑤夢のあとに、作品7-1（フォーレ）

ガブリエル・フォーレ（1845～1924）は、その生涯に、100曲に近い歌曲をのこしているが、それらは、ピアノ曲や室内楽作品とともに、彼の創作の中心をなすジャンルのひとつともなっている。この〈夢のあとに〉は、その初期に属する1878年に書かれたもので、作

詩者は明らかではないが、彼のこのジャンルにおけるひとつの個性を確立したのとして、見のがすことのできぬ存在をなしている。また、それは、歌曲としてばかりでなく、カザルスやバックマンによって、チェロあるいはヴァイオリンとピアノのために編曲されたことによっても広く親しまれ、さらに管楽器などでも数多く演奏されている。一見、簡潔な書法によっているが、その旋律のもつ品格と美しさとは傑出したものといえよう。

#### ⑥ガヴォット（ロレンツィーティ）

ジョセフ・アントワーヌ・ロレンツィーティ（1740?～1789）は、イタリア系フランス人であり、彼の父は、ナッサの王子のもとで聖歌隊長をつとめていた。彼は、ヴァイオリンの演奏にすぐれ、また、注目すべき多くの管弦楽作品や室内楽曲をも作曲しているが、その作品は、パリ・オペラ座のヴァイオリン奏者をつとめ、のちに〈ヴァイオリン教則本〉（1798）を出版している弟ベルナルド・ロレンツィーティの作品と、しばしば混同され、混乱を招いている。この〈ガヴォット〉は、ジョセフ・アントワーヌの作品とされているもので、E. ナーニによって、コントラバスとピアノのための編曲がなされている。曲は、短い中間部をもったほぼ3部形式をなす小品であるが、コントラバスのもつ表現力は、よくいかされている。

#### ⑦マドリガル 短調（グラナードス）

スペインの国民主義的音楽に重要な足跡のこしたエンリケ・グラナードス（1867～19

16) は、本質的にロマンティックな創作を重ねたが、また、18世紀末のマドリードの貴族的なものや大衆的なものとが融合した独特な文化や風俗にも深い愛着をもち、さらにフランスコ・デ・ゴヤに強く魅かれていたことでもよく知られている。彼の最後の大作となったオペラ〈グイエスカス〉は、その象徴でもあったわけであるが、この“マドリガル”は、“エリセンダ”や“トゥロバ”などと共にチェロとピアノのために書かれた作品であり、パブロ・カザルスに捧げられている。曲は、アンダンティーノの短いピアノの導入と、レチタティヴォ風にと指示されたチェロの歌とによって始められるが、導入の部分は、間奏の役割りも果し、自由な Rond 風の構成で歌われてゆく。和声の変化による調性の浮動も、独特の雰囲気を生みだしている。

#### ④精霊の踊り(グルック)

クリストフ・ウィリアム・グルック (1714-1787) は、オペラの改革者のひとりとして知られているが、とくに〈オルフェオとエウリディーチェ〉は、そうした彼ののこした革新的な作品のひとつとしても、広く知られている。作曲は、1761年になされたが、この歌劇中のいくつかの部分、とくに第2幕におかれた“精霊の踊り”などは、いろいろな楽器のために編曲されて親しまれているばかりでなく、後世、いくつかの二次的な創作をも生みだしている。一般には、フルートで演奏されることが多いが、ここでは、ファビアン・セヴィツキーによるコントラバスとピアノのた

めの編曲が用いられている。

#### ⑨サマータイム(ガーシュウィン)

ジョージ・ガーシュウィン (1898~1937) が、いわばフォーク・オペラとして発表した〈ボーギーとベス〉は、ミュージカル・コメディあるいはミュージカル・ブレイの前身をなすものという見方もあるが、しかし、実際には、それは、伝統的なオペラとしての理念を踏襲したものであり、その音楽としての位置は、先の点でも注目すべきものがある。初演は、1935年9月にボストンでなされたが、その第1幕第1場で、漁師ジェイクの妻クララによって歌われる“サマータイム”は、当初から親しまれ、独立して歌われるようになったばかりでなく、いろいろな形で演奏されるようになっていく。ここでは、それをコントラバスとピアノとによって演奏している。

#### ⑩夕星の歌—歌劇〈タンホイザー〉より(ワーグナー)

リヒャルト・ワーグナー (1813~1883) は、その巨大な創作力によってオペラの歴史に重要な足跡をのこしたが、〈タンホイザー〉は、1845年に、3幕からなるロマンス的オペラとして完成され、同年10月19日にドレスデンの宮廷劇場で初演された。その後、この歌劇は、改訂が加えられ、1847年のドレスデン版と1861年のパリ版とがのこされている。この作品では、また、序曲をはじめ知られている部分が少なくないが、有名な“夕星の歌”は、その第3幕第2場でヴォルフラムが竖琴をひきつつ歌うものであり、ここでは、その主要な部分が、後奏をも含めて演奏されている。

(以上・藤田由之)



## ●ゲリー・カーの芸術と その録音

巨匠ゲリー・カーとの出会いは、1980年5月、彼の初来日のときであった。何としても彼のすばらしいコントラバスのレコードを制作したかった私たちスタッフは、幸運にもその機会を得ることができた。キングレコードの第1スタジオで録音したシュールベルトの「アルペジオーネ・ソナタ」のアルバムが、記念すべき第1枚目となった。そのときの感激は今もって新鮮によみがえってくる。

ゲリー・カーはその翌年の81年9月に、再び彼の最良の伴奏者であるハーモン・ルイスと共に日本を訪れた。当然のことながら、私たちは新たな録音を計画して彼らを待ち受けていた。しかも、こんどは兵庫県宝塚市が建てた当時から、その音の良さで評価の高いベガ・ホール（客席数約370）を使ってみようということになった。録音機器は一切東京の当社から運ばれ、3日間このホールを借り切って2枚のアルバムを録音した。その1枚は「アルピノーニのアダージョ」と題するオルガンのバックによるもの、もう1枚は「夢のあとに」というタイトルのピアノ伴奏のアルバムであった。

この時の2枚から特別にカブリングされたのが、今回の第一家庭電器(株)さんのために作られたスペシャル・ヴァージョンのCDである。

録音はデジタルとアナログの二つのテープ

レコーダーによって、同時に収録された。録音方式は、マルチプル・テープは一切使わず、ダイレクトに2チャンネル・ステレオ・マスターとして録られた。

そして、このCDのためのソースとしては、デジタル・マスター・テープが採用された。（ちなみに、同時に制作される〈スーパー・アナログ・ディスク〉では、パラレルに録音されたアナログ・マスター・テープからカッティングしている。したがって、この両者を比較試聴することに興味を持たれる方があるかも知れない。）

録音時のメモは、高浪初郎ミクサーの別項を参考にさせていただきたい。

ゲリー・カーほど楽曲を歌い上げる表現力の豊かな楽器演奏者は、昨今のアーティストの中にはほとんどいないのではないかと思う。

それはコントラバスという楽器には限定されない広範囲の演奏家の一人としてみても、比類のない存在ではなかろうか。その起伏に富んだ表情は、実に柔軟で豊麗な響きを持っている。

冒頭の曲「アルピノーニのアダージョ」には、私の生涯忘れることの出来ない思い出がある。ベガ・ホールでの録音のとき、ゲリーとハーモンはこの「アダージョ」の部分的リハーサルをしていた。そのときは、まだこの曲を彼らがどのように演奏するかはよくつかめなかった。ゲリー・カーの録音はほとんどテイク1かテイク2くらいでOKになること

が多い。この時もいきなりテイク1というところでテープを廻し始めた。モニター室では私とディレクターの西田君がミクサーの後方の机に並んで座った。

曲が進むにつれて、そのあまりにも予想を越えたすばらしい演奏に感動して、シビアにモニターすべき本来の職分を思わず忘れてしまい、不覚にも涙が流れて止まらなかったのである。恥かしいがどうにもならない。そこで曲が終わったとき、隣のディレクターをそっと見ると、彼も同じように泣いているではないか！ 長年多くの録音の仕事を手がけてきた私たちの魂をここまで揺れ動かしてしまうゲリー・カーの芸術。

その感動を伝えるのは、単に物理特性やハイ・テクノロジーだけで解決するものではない。まず、人間の演奏する“音楽”そのものの魅力が大前提となるはずである。ゲリー・カーはそれを私たちに与えてくれる稀な人ではないかと思う。

〔1989年6月、プロデューサー：高和彦彦〕

## ●レコーディング・メモ

クラシック音楽の録音は、すぐれた響きを持ったホールなどで録るのが理想的である。このアルバムの録音も、クラシック音楽専用設計された、すばらしい音響特性を誇る宝塚市のベガ・ホールで行なわれた。

マイクロフォンとそのセッティングに関しては、マイクの種類や楽器との距離、角度、

高さなどの位置が、楽器の「音色」、「響き」、「艶」に大に関係する。

ゲリー・カーのコントラバスの音を捉えるために使用されたマイクロフォンは、歴史的な名器といわれている西ドイツ・ノイマン製の管球式コンデンサー形、U-47をメインに使った。また、この楽器全体の響きをとらえるためのマイクロフォンには、同じくノイマンのU-87を1本、さらに楽器から一定の距離を置いてセットした。中でもオルガン伴奏の曲では、コントラバスの低域と、オルガンの重低域とは混濁しやすく難かしい。それに対しては、オルガンには立ち上りの良い西ドイツのショップスのコンデンサー・マイクロフォンCMC-55Uを、コントラバスのためには、厚みと力強さをもった前記のU-47のマイクと使い分け、それぞれのキャラクターの違いで見事に低音域の分離に成功したと思っている。

ホールの残響効果には、客席の最後部に立てた2本のマイクロフォンで収音している。

オルガンは、コントラバスのやや後方に空間を置いて定位させ、左右いっぱい広げている。コントラバスは、その手前中央にくっきりと浮彫りさせた。

ピアノ伴奏曲では、ピアノが僅かに後方に定位してあるが、左右の広がりやオルガンよりはやや左右の内側に定位させた。

オルガンのハーモニックスを十分に含んだ超低音域から最高音域までの周波数レンジの

広さと、コントラバスのエネルギー感をもった艶やかな響きは、皆さんの再生システムの特に低域の分離のテストにも最適のソースになると思う。

■マイクロフォン：ノイマンU-47×1

ノイマンU-87×5

ショップスCMC-55U×4

■マスター・レコーダー：

(デジタル)三菱電機X-80 2チャンネル  
(固定ヘッド・オープン・リール式)

テープ・スピード：38cm/sec

(アナログ)米スカーリー280-B 2チャンネル

テープ・スピード：38cm/sec

(注) この録音では、デジタルとアナログのテープレコーダーにより、同時並列に収録されている。

[チーフ・ミキサー：高浪初郎]

## ●スタッフ

プロデューサー：高和元彦

ディレクター：西田克彦

ミクシング・エンジニア：高浪初郎

アシスタント・エンジニア：金子清次

録音場所：宝塚市ベガ・ホール(非公開)

録音年月日：1981年9月20～22日

フォトグラファー：郷 忠雄

デザイン：S. S. デザイン

制作協力：樫サンデュエット

企画・制作：第一家庭電器株式会社

**DAMP**

製造：キングレコード株式会社

# Adagio d'Albinoni

GARY KARR *double bass*

HARMON LEWIS *pipe-organ & piano*

## 《アルビノーニのアダージョ/ゲリー・カー》

### ① アルビノーニのアダージョ

(T. アルビノーニ=R. ジャゾット編)

### ② ソナチネ 二短調

(L. v. ベートーヴェン)

### ③ 小品 第5番

(C. フランク)

### ④ アヴェ・マリア

(J. S. バッハ=C. グノー)

### ⑤ 夢のあとに

(G. フォーレ)

### ⑥ ガヴォット

(J. A. ロレンツィーティ)

### ⑦ マドリガル イ短調

(E. グラナードス)

### ⑧ 精霊の踊り

(Ch. W. グルック)

### ⑨ サマータイム

(G. ガーシュウィン)

### ⑩ 夕星の歌

(歌劇「タンホイザー」より)

(R. ワグナー)

## ゲリー・カー

(コントラバス)

## ハーモン・ルイス

(パイプ・オルガン:1/4/ピアノ:5-10)



### ① ADAGIO IN D MINOR (8:53)

(T. Albinoni-R. Giazotto)

### ② SONATINE IN D MINOR (4:45)

(L. v. Beethoven)

### ③ PIÈCE V (5:56)

(C. Franck)

### ④ AVE MARIA (4:24)

(J. S. Bach-C. Gounod)

### ⑤ APRÈS UN RÊVE (3:42)

(G. Fauré)

### ⑥ GAVOTTE (2:37)

(J. A. Lorenzini)

### ⑦ MADRIGAL IN A MINOR (6:59)

(E. Granados)

### ⑧ DANCE OF THE BLESSED SPIRITS (Mélodie) (4:35) (Ch. W. Gluck)

### ⑨ SUMMERTIME (3:09)

(G. Gershwin)

### ⑩ O DU MEIN HOLDER ABENDSTERN from "Tannhäuser" (4:19)

(R. Wagner)

## GARY KARR

Double-bass (Amati, 1611)

## HARMON LEWIS

Pipe-Organ (Kuhn, Switzerland) : 1-4

Piano (Steinway) : 5-10

**DAMP**

STEREO・DOCD・0019